

海鬼灯

愚草

海
鬼
灯

うみほろずき

啓蟄や晴れてオケラも経を読み

鶏の一蹴りありて蚯蚓みみずひき

花虻の念仏耳朶に午睡かな

転生か蟬の穴あり 七回忌

地底より這い出でたる蟬遍路

空蟬の手脚に透けて月のぼり

燭台に五体投地か 夏の虫

※転生：生まれ変わること。輪廻（りんね）。

蝶一頭 木染の生地に蛇の目かな

葉隠れの虫が穴より覗きおり

水陰のむかし蜻蛉のさみしけれ

水鷄すいけいの鳴くは河原の石ばかり

谷川に鈴転がして河鹿鳴き

川とんぼ石の上より拝みおり

カワセミや翡翠の剣で水を斬り

※水鷄：河鹿の別名。または秧鷄（くいな）。

カワガラス世界の虫を口に詰め

くさひばり

草雲雀ひげの長さに震えおり

共喰いの骨齧りおり 狭き檻

花ごろも箆笥の底に紙魚しみの声

二歩三歩ずらして蠅のたたずまい

水月を抱きて浮くや井の蛙かわず

船虫や磯の香りを弾はじきおり

※紙魚：衣魚とも書く。

スカラベや日照りの中のエコロジ―

尻天上 フンコロガシに勝負あり

老いてなお五徳の蠅が掌をかざし

野仏に前のめりの時雨かな

豚の鼻 われ落款らっかんに貰いうけ

真空のくびれ瓢箪 風にゆれ

負の兵士 真空地帯を生き残り

※スカラベ：フンコロガシ。天地創造の神。

ふんどしの紐をたぐりて瓢ふくべかな

たそがれて首なし地藏のかなしけれ

野垂れして浄土ヶ原に虫の声

猫の尾の呪文となえて秋日和

蝙蝠こうもりの吊りて逆さの夢が見え

文明の崩れるときも木魚かな

視るほどに蛙も人も 尾舐骨

※瓢：かんぴょう。

文明の闇に畳みし 人柱

悪の華 人柱が国を建て

動物園 互いちがいの檻の中

罪人つみびとや時計の針を錆として

条理なき時計回りにセツトされ

くちびるに白縄呪縛の縄を緬い

亡国の御用学者が継ぎをはぎ

魂を三つ兎のときに抜いた人

へその緒をにぎったままの兎が育ち

割り切れぬ分子分母に首かしげ

紙オムツ経済学の漏れを拭き

巾着の学者風情がモノを言い

蛇の穴 見果てぬ夢がトグロ巻き

ちりあくた

塵介 万華鏡の花盛り

欲の皮 五つの指に膜を張り

指ひとつ跳ねる畳の蚤を狩り

一匹の蚊に泣かされて蚊帳の中

野にありて素浪人かよ破れ傘

金色こんじきの小鉤こはせ隠して土を踏み

軍鶏とさかや蹴爪かくして血の鶏冠

風そよの路 戦そよぐことなし枝の揺れ

※破れ傘：キク科の多年草。

水溜り　ハリガネ虫が綾をとり

毒薬と妙薬をこねあわせ

木の芽どき　悪魔も神に変身し

払い賜わぬ清め賜わぬ核のゴミ

浄土なき文殊普賢の菩薩かな
もんじゆふげん

薬売り　むかし神風いま神話

罪と罰　とうでん獄門晒し首

のつぺら棒一筆彫るも鑿のみはなし

鎧無き太刀魚下げた漁師かな

墓守の鴉となりて 茶碗酒

欲が過ぎ天秤棒に袖とおし

夏の犬鞆ふところとなりて 赤い舌

金蠅に帝国ありや 馬の糞

属国の透かし模様か星条旗

一票の格差に群れて冬の陣

尾の切れた魑魅魍魎の揃い踏み

日の丸のふんどし絡げ都落ち

老耄ろうもうの引きずる夢に黄泉路かな

政界坊 透かして見れば透けて見え

おひろめはオツムテンテン二度わらし

危惧種より国の死滅が先に立ち

※老耄：八十歳、九十歳の老人。

アラジンのランプこすりて蠍さそりいで

ろくろ首 裏の砂漠であぶら舐め

不条理の砂漠の中に 蟻地獄

列強の巾着下げて穴を掘り

多国籍亡者砂漠に 骨晒し

帝国の素顔うつしてアルジェリア

血にそみて弔旗はためく砂嵐

骨一つ手乗り木魚に浮かれおり

蚊帳のなか亡魂ひとり鼾かき

寂聴のひたいの蠅が数珠を揉み

閻魔帳 位牌の底にそつと置き

めぐり来る季節まといて枢ゆき

時節がら 骨壺睨み暖をとり

ノドボトケ箸に抓んだ菩薩かな

青い目の猫や魚も舞いあがり

しらぬい
不知火のあれは鬼火や漁り火や

船霊をきよしゆう虚舟に積んで浮き沈み

怨の文字 満帆に孕みおり

舫もやい綱 解きて苦海の波静か

文明の 神のむさぼる人柱

底波に洗われて鳴く 海鬼灯

※虚舟：人の乗っていない空舟。

二〇一三年 夏

高知県高岡郡四万十町
大正中津川二一〇の一

佐々木 泰